

次世代に伝えたい皮膚病理の言葉と匠の技 Lest darkness fall in dermatopathology

羅針盤

Lest darkness fall in dermatopathology



山元 修

Yamamoto Osamu

前 鳥取大学医学部皮膚科学分野教授，鳥取大学名誉教授

表題中の“Lest darkness fall”の邦訳は「闇よ落ちるなかれ（早川書房）」で、私の愛読書の一つである Lyon Sprague de Camp 著の歴史 SF（1939 年）の題名からです。西ローマ帝国滅亡直後のローマにタイムスリップした主人公が、ビザンチン帝国のユスティニアヌス 1 世の命によるペリサリウスのイタリア遠征により、伝統的な古代ローマ社会が完全に破壊され、暗く長い中世に陥るのを防ぐべく、知の限りの現代知識をイタリア半島に広めようと奮闘努力する物語で、主人公が叫んだのがこの言葉です。

私の日本皮膚病理組織学会理事長時代の唯一最大の目標が“皮膚病理に従事する若手の発掘・育成”でした。当時は皮膚病理に精通した先生方が次々と引退され、そのレベルの低下とともに、皮膚病理に興味をもつ若手も激減していくのを実感していたからです。仲間とは、皮膚病理は絶滅危惧種であると半ば自虐的に話していました。そこで本邦の皮膚病理が衰退しないよう、若手のためのさまざまな新規事業・改革を行いました。“闇よ落ちるなかれ”という思いを込めた地味な活動が実り、絶滅の危機から脱しました。

個人的には、インターネット上でバーチャルスライドを用いた皮膚病理セミナーを催す活動や、皮膚病理の魅力を伝える誌面活動などをしました。その際注力したのは、美しい画像の提供でした。病理組織写真を撮る際は、顕微鏡や撮影装置の設定をさまざまに変えて最適な撮影条件を割り出し、被写体に応じ微妙に調整して最高の画像を得る努力をしました。やはり若手にはクリアで美しい画像をみせるの

が効果的だからです。煩雑な作業ですが、小さいころより美術が好きであった私にはさほど苦痛ではありませんでした。本特集でもできる限り美しい写真を採用しました。これから皮膚病理を学ぶ若手も、対象を的確に捉えた、しかも美しい病理組織写真とはどのようなものかを知ることが重要です。多くの病理組織写真をみて、経験を積んでください。

本誌の総論では、初心者向けに皮膚病理診断の進め方について入門編的に述べています。続く各パートではベテラン受けも考え、一般皮膚病理教書であまり触れられない、あるいは画像が提供されない病理組織を、なるべく取り入れました。Part1 では、総論の知識を身につけた後にまず間違いなく遭遇する皮膚病理の落とし穴について、次世代に受け継いでもらいたい金言として解説しています。Part2 では、私が研修医時代から手がけ、大部分の若い読者は見たことがなく、現在は衰退した電子顕微鏡の活躍できる場についてセンチメンタルに触れ、光学顕微鏡レベルではつかめない現象について、何が起きているのかという診断学以前の現象論・病態論についての考え方を解説しています。Part3 では肢端部皮膚病変の病理組織を紹介しますが、生検しにくい反面、その解剖学的特性より特異な疾患や、全身的背景をもつ疾患が多く、かつ意外に病理の教書に掲載が少ない点で取り上げました。Part4 では、私の医師生活の前半に主に研究し、初心者にもベテランにも受けるような美しい病理組織像をみることのできる皮膚付属器腫瘍を、ノスタルジックに取り上げました。

最後に、AI が臨床医や病理診断医の能力を凌駕する時代が間近に迫っていますが、そのようななかで衰退しつつある皮膚病理が生き残っていけるのでしょうか。AI 診断した結果をヒトが最終的にチェックするのだという回答もありますが、恐らくそれも一時的でしょう。やはり病理組織をみてなぜそのようなならなければならないのか、という論理的必然性を考えその知識を AI に与える、という役割を担うのが、皮膚病理医に残された道だと思います。それもやがては AI がとって代わるでしょうが、そのときはたぶん、物事を考えるという行為をしなくなった人類は退化（類猿人化？）しているでしょう。SF の話ではないですが、その前に“Lest darkness fall”と叫ぶ人類が出てきてほしいものですね。